跡見学園女子大学国文学科報　第二十二号　（平成六年三月十八日）

谷文晁・関克明・山東京伝の合装書簡について

柴田光彦

近頃眼幅を得た谷文晁・関克明・山東京伝等の書簡を合装した一軸について述べてみることにする。それはかなり大きく、白地の紙表装の明朝仕立で、縁は鼠地の揉紙を用いている。天地一九四・五センチ、幅一〇六・七センチ、軸長一一二・七センチ。

上段に（一）細井広沢の書を据えて、次に（二）谷文晁の清水清左衛門宛書簡、一八行を、その下に（三）関克明の清水助左衛門宛書簡、六一行の長簡なので、三〇行と三一行と二つに切り、二段に並べる。さらにその下に（四）山東京伝の対富真人宛書簡、一七行、（五）同じく山東京伝の呉錦洞老爺宛書簡、二九行を貼りこみ、巻留に後筆で「広澤、文晁、関、京傳、寄張」と題している。

一　細井広沢書

飄然思不羣

丙午秋　　廣澤慎書

（別筆）

廣澤先生真蹟　關其寧鑒定　　印　印（其寧）

この軸の第一に掲げられた細井広沢（万治元―享保二〇。一六五八―一七三五）の書（二六・七×九六センチ）は、杜甫の「春日憶李白」の「白也詩無敵。飄然思不羣。清新庾開府。俊逸鮑参軍。渭北春天樹。江東日暮雲。何時一樽酒。重與細論文」の第二句である。

一、細井広沢書

詩を読み下せば、「白や敵なし。飄然として思い群ならず。清新は庾開府（庾信。北周の人。累遷して驃騎大将軍・開府儀同三司に至る。「庾開府集」がある。）、俊逸は鮑参軍（鮑照。南朝宋の人。前軍参軍、「鮑参軍集」がある。）。渭北春天の樹。江東日暮の雲。何れの時か一樽の酒。重ねて与に細かに文を論ぜん。」、句意は、その思想が群に超越していることをいう。

丙午秋は享保十一年（一七二六）、六九歳の筆。一字の大きさ高一八センチ前後。

左端に「廣澤先生真蹟　關其寧鑒定／印　印（其寧）」とある。

其寧は広沢の高弟関思恭の門人。本姓落合氏、見込まれて養子となった人で、享保一八年に生まれ、寛政一二年（一七三三―一八〇〇）四月没、歳六八。文晁は寛政四年壬子（一七九二）の夏、三〇歳の折、この関其寧の肖像を迫真的に描いている。菊池五山の『五山堂詩話』巻五にそのことが見える。

「谷文晁、嘗て関其寧の為に真を写す。適々黒宮生なる者有りて来る。谷挙て以て之に示す。関に於ては素より未だ面を識らず。却後数日、諸人増上の一子院に会す。関先づ座に在り。生忽ち前者の谷が図する所を憶ひ、関を認て姓名を通じ、且つ其の由を陳ず。彼此大に笑う。後、谷これを聞き、生に貽るに詩を以てして、云く。

衣巾瀟洒愜清臞。頰上三毛得似無。
敢比傳神戴文進。金陵當日索人圖。

（衣巾瀟洒清臞（痩）に愜（適）ふ。頰上の三毛、似ることを得るや無きや。敢て比せんや、神を伝ふ戴文進。金陵当日、人を索るの図と。）

此れ壬子夏中の事なり。追て録して以て嘉話を存す。戴が事は五雑組に見ゆ。」（原漢文）

注釈すれば、戴文進は明代銭塘の画家で、静庵・玉泉山人と号し、その伝は『明史』聶大年伝・『杭州府史』・『明画録』・『名山蔵』等に見える。『五雑組』の戴の話は、金陵に行った時に行李を傭夫に預けたまま、その行方が分らなくなったので、紙筆を借りて、その傭夫の状貌を図して衆傭を集めて見せたところ、直ちに判明して行李を取り戻したという。

「古人画を能くする者の、必ず能く真を写す。蓋し時に人物を画いて尚ぶ故なり」とあるのを受けての五山の詩である。

広沢の書は元は扁額であったものを、これらの書簡を合装するにあたり、剝いで改装したものであろう。赤く焼けて傷みが出ている。しかし、以下の文晁・克明・京伝、いずれもつながりのある人達の書簡であり、合装のまとめに広沢の書を据えたのはなかなかよく考えられていると思われる。

二　谷文晁書簡　清水清左衛門宛

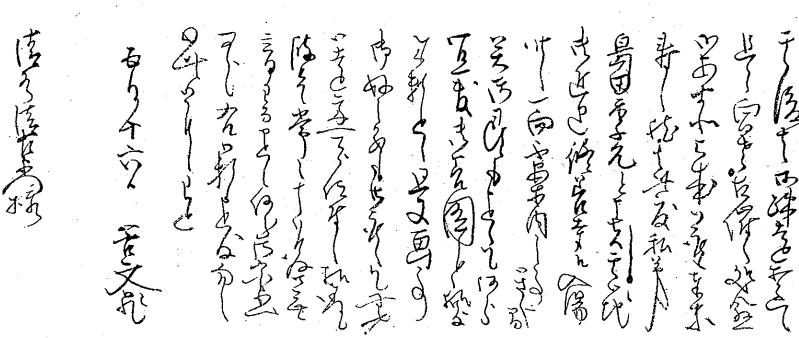
其後は御疎遠打過候。」追〻向暑相催候処、愈」御安泰被成御座候。奉慶」寿候。然は此度私弟」島田季允と申者、其御地」御近辺修善寺江入湯」仕候。一向不案内之事ニ御さ候間、」若御尋も申上候ハ、何分」宜敷御差図被下候様仕度、」奉頼上候。且又画事」御好之義も御座候ハ、」無」御遠慮可被仰付候様、奉存候。」彼是常〻は乍存御無」音已而申上候。何分御容恕」可被下候。右御頼申上度、忽〻」如此御座候。已上

五月十六日　　谷　文晁

清水清左衛門様

要旨は弟の島田季允が修善寺へ入湯に行くから、近くであるので宜しく頼む。絵がお好きならば御遠慮なくお申付けくださいという内容のもの。谷文晁（宝暦一三―天保一一。一七六三―一八四〇）については贅言は不要ながら、田安徳川家の臣で、松平定信に重用されていた。

弟の島田季允は安永七年（一七七八）江戸に生まれた。兄文晁より十五歳下、正月元日の生まれから、元旦と号し、また後素軒、嘯月、香雲軒などの別号がある。寛政十二年（一八〇〇）二三歳の頃、鳥取藩江戸留守居役、嶋田図書の養子となった。『古画備考』には元旦の江戸の住居は鍛治橋内と記されている。文化八年（一八一一）、四九歳で江戸御留守居助。元旦が五百石の家督を嗣いだのは四二歳の文政二年（一八一九）九月で、五代寛輔を名乗る。文政十一年（一八二八）、五一歳の時、御国勝手を命ぜられ、翌年赴任、十一年後の天保十一年（一八六〇）六月十三日没、享年六三歳。鳥取市内景福寺に葬る。同年十二月



二、谷文晁書簡

島田元旦画　東方朔図（鳥取県立博物館蔵）

十四日には、文晁も七四歳で没している。

鳥取県立博物館蔵の「当方朔図」は依頼者はともかくも、当にこの時の作で「乙丑夏日写於修善寺客舎」と識されている。乙丑は文化二年（一八〇五）、五月十六日の書簡、画は元旦二五歳の作品である。

＊『特別展　江戸画壇の巨匠　谷文晁とその周辺の画家たち』鳥取県立博物館　平成三年）所載。

宛名の清水清左衛門は、現所蔵者の祖に当たる沼津の本陣清水清右衛門の文化年代に名乗った名であろう。『沼津市誌』（蘭渓社書店　昭和十二年）に「本陣十四軒屋清水清右衛門は小田原北条氏康の浪人清水上野介の後裔にて、政宗の陣刀を有す」と見える。前沼津市立駿河図書館長の久保田光雄氏に御教示を乞うたところ、氏は市史編纂室の資料から、安政と慶応の年代は、清右衛門、他に太郎作があり、清左衛門は時代が上がるが、文化年代については目下のところ判然としないとの回答を寄せられた。

三　関克明書簡　清水助左衛門宛

榊原氏出立ニ付、一筆致啓上候。」追日寒威相成候得共、愈御安」全被成、一入珍重奉存候。當方相替候」儀も無御座候。御休意可被下候。。

一、文晁江御頼被成候、西園雅集、并」前後赤壁二幅對出来、私方江」御預申候。文晁より之手紙一通、」則上申候。御落手可被下候。御挨拶之」儀は、五百疋位も不被遣候ハヽ相成申」間敷と奉存候。尤当年中ニ而は」春ニても宜と奉存候得は、先ツ」手帋ニ而御禮被仰遣可然奉存候。」当方江御出宿も被成候ハヽ、其節ニ而も」可然奉存候。但し、銀二枚成とも」御考之上、可然奉存候。當年不被遣候ハヽ、」当昏私方より宜敷ニ申置候様」可仕候。早速表具いたし上ケ」可申候哉。春に成早〻仕立上ケ」可申候哉。御相談仕候。被仰遣次第、」取計可申候。当年御普請之所、」御落成と申候ニも無之候間、春ニ相成」表具いたし上候而も、可然哉とも」奉存候間、何レとも貴報次第」可仕候。

一、島津氏御頼之板木出来候間、」上申候。彫料之儀は弐百文ニ御座候。」左様御承知可被下候。

一、御城内より御頼被成候認物、御寸法」之通相調上申候。尤是は豊蔵とのと」申御方之ニ御座候。

一、豫三との御頼被成候懸物、先つ』此節一幅出来上申候。御序ニ被遣」可被下候。先達而御書状被下候處、」其後取込候而、延引ニも相成候まゝ、」返書不仕候。御序ニ宜奉頼上候。

一、御地御普請之儀、追〻御出来と」奉存候。乍然、遠路隔候儀趣、」いかゝと奉存候。為御知可被下候。御願之」筋なとハいかゝ御座候哉。是又」御様子承知仕度奉存候。

一、先達而積出し申候品〻、無滞」御落主(ママ)之趣、大慶仕候。御張付」等之儀ハいかゝニ御坐候哉。拙筆」御張付之儀は、呉〻も御地と」御相談次第専一と奉存候。

一、此間今井ニ而承候得は、沼津ニ」御病人御坐候よし之趣、豫三との」被仰遣候趣、いかゝ之義ニ御坐候哉。」御案し申上候。

一、御ばゝ様、先達而は少〻御腰」御痛被成候よし、此節ハ篤と」御快方ニ御坐候哉。御様子相伺度」奉存候。

一、当方何そ御用御坐候ハヽ、無」御遠慮可被仰下候。

一、和田蔵氏江も別段書状上不申候。」御序ニ宜奉頼候。尚追〻重便」可得貴意候。恐惶謹言

十一月十三日　　關　忠蔵

清水助左衛門様

人〻御中

尚以、此間御懸合申候袋棚之」竪横、為御知可被下候。以上

（』は切り目）

広沢の書の極めを書いた関其寧の名は源蔵、その男子の克明、通称源蔵、号は潢南。明和三年（一七六八）生まれであるから、文晁より五歳年下である。書中の豊蔵・豫三・今井・和田蔵氏、

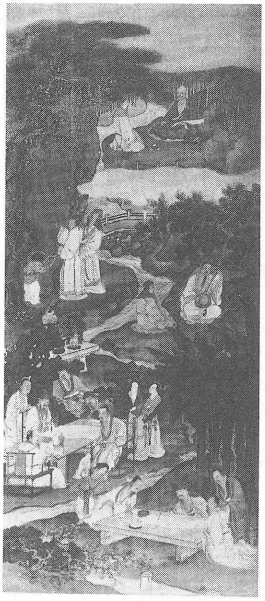
三、関克明書簡

および榊原・島津氏等について、総て未勘であるが、旧沼津水野藩人名資料の『旧菊間藩士人名録』（沼津市立駿河図書館　昭和五十六年）に、榊原・島津共に二人の名があげられてい、また享和三年版『東海道人物誌』の沼津駅に、医学・漢学の嶋津元敬（名維敬、字士篤、号蓮峰）と漢学・詩・文章の嶋津一斎（名峻、字紹洋、号東洋）がいる。

「西園雅集」は、宋の蘇軾・黄庭堅らが西園に集会したのを時人、西園雅集図を描き、米・揚子奇の西園雅集図記が知られる。文晁の手記『過眼録』に寛政八年（一七九六）八月二日、幾内の古社寺等の宝物調査の旅の途次に立ち寄った木村兼葭堂の家で「木蘭陳雪字雪人筆」の図を見ている（「集古会誌」明治四十五年五月）。

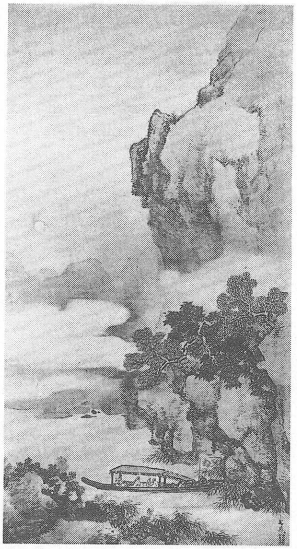
参考のために文晁の図録中、管見に入ったものをあげれば、巧芸社の『文晁遺墨集』（昭和五年）二〇に團琢磨蔵、絹本、巾二尺・竪三尺五寸五分の作品が掲載されており、右下に辛うじて「文化元年甲子七月　文晁（印）」と読める。一八〇四年、四二歳の作である。重要美術品。

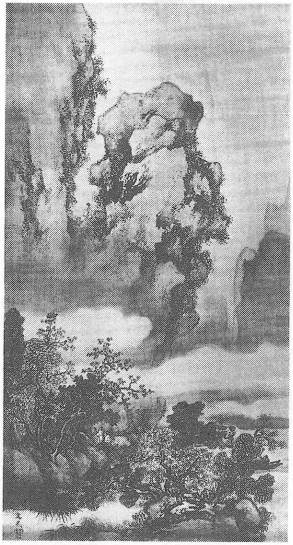
「前赤壁賦」は、蘇軾が壬戌（元豊六年―一〇八二）七月既望

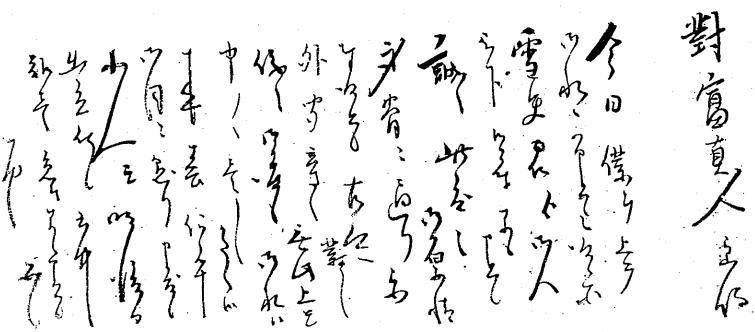


参考　一、谷文晁画　西園雅集図

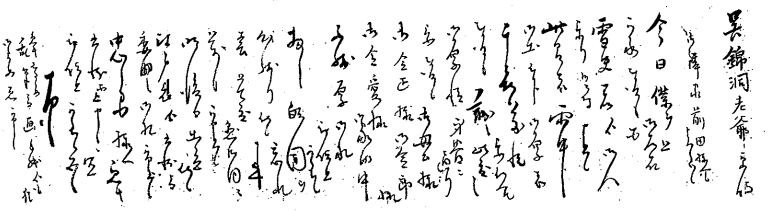
参考　二、谷文晁画　前後赤壁図　双幅







四、山東京伝書簡　一



五、山東京伝書簡　二

に友人楊世昌と赤壁に遊び、「後赤壁賦」は、その冬郭遘・古耕道の二人と再遊した時の作。西園雅集図ともに画題となっているもので、関氏を通じて依頼したものと思われる。こちらは七清会『文晁遺墨展覧会図録』坤（昭和七年）の一三七に大島要三郎蔵、「前後赤壁双幅」絹本着色、巾二尺、竪三尺七寸四分の作品が掲載されているが、署名と「文化□□／文尾画印」の印がある。干支の二字が読めないが、印譜によれば、「丁丑」すなわち文化十四年（一八一七）、五四歳の作である。この他にも幾つかの作品が展覧会目録に見受けられる。

この書簡は一連の他のものの年次と合せ考えても、文化年中を下らぬものと考えてよいと思われるが、いかがであろう。なお、克明は、天保六年（一八三五）四月、六八歳で没している。宛名の清水助左衛門であるが、先述の沼津本陣の清右衛門家の一族であろうか。なお小田原の本陣の清水氏も小田原北条氏の家臣、豆州先手の海賊大将の後裔、大清水（金左衛門）・小清水（彦十郎）の二家がある。

四　山東京伝書簡　一　對富真人宛

對富真人　　京傳

……

今日、僕ヲ上テ」御礼可申上候と存候所、」雪夫君より御人」被下候ニ付、早〻、申上候。」誠〳〵此度之御厚情」身骨ニ通り忝」奉存上候。古郷へ對し」外聞立たく、無此上も」儀ニ

御座候。御礼ハ」中〳〵尽しかたく候。」来春何卒」御目ニ懸り申度候。」小人も明後日」出立仕候。書中」難尽、急キ早〻申上候。

十四日　　頓首

五　山東京伝書簡二　呉錦洞老爺宛

呉錦洞老爺　　京傳

……

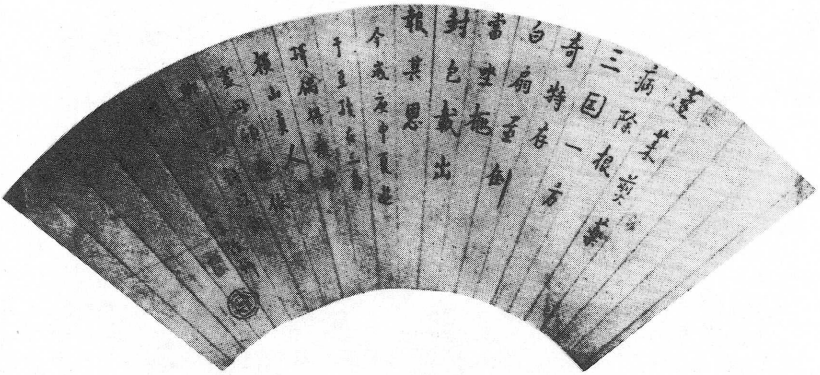
御隣家前田様へもよろしく〳〵。

今日、僕ヲ上、御左右」可承奉存候所、」雪夫君より御人」参り候ニ付、申上候。」此間者雨中」御出被下、御厚志」千喜萬悦、忝仕合」奉存候。誠ニ此度之」御厚情身骨ニ通り」忝奉存候。御母公様、」御令正様、御令郎様、」御令愛様、御家内中」不残厚御礼被仰上可被下候。」扨〻皈国ヲ忘れ」心残り仕候。来」春めて度懸御目ニ、」萬〻可申上候。」明後日出立仕候。」江戸表より書状ニて」委曲之御礼可申上候。」忠兵衛様へ急キ」書状不上申候。宜」被仰上可被下候。頓首

十四日

急キしたゝめ、／乱筆ニ而画手紙よりも猶」御よめ兼可申候。

（四）と（五）は、江戸後期の戯作者の山東京伝（宝暦一一―文化一三。一七六一―一八一六）のもの。ともに「十四日」同日の書簡。明後日帰国にあたり、僕を上げて御挨拶すべきところ、「雪夫君より御人」が参られたので、その幸便にこの度の御厚情に御礼申し上げるという内容である。



山東京伝漢詩扇面

京伝は寛政十二年（一八〇〇）伊豆・駿河に遊び、三島で病気になり、横山真人の霊丹を飲んで治癒したことが、故小池藤五郎氏蔵の扇面で知られる（小池藤五郎『山東京伝』口絵人物叢書　吉川弘文館）。すなわち、

「印」（菊屋）
蓬萊煎薬／病除
根／三国一方／
奇特存／白扇置
倒／當坐框／封

包載出／報其恩

今歳庚申夏遊／干豆駿在三島／驛偶得疾嘗／横山真人之／霊丹頓癒依／聊連巴詞以謝／恩　山東京傳拜

「印」（糸印）

（蓬萊の煎薬、病根を除く。三国一方奇特存す。白扇を倒さに置き、当に框に坐す。／封包載せて出し、其の恩に報ゆ。

今歳庚申の夏、豆駿に遊び在三島駅に在り。偶疾を得て横山真人の霊丹を嘗めて、頓に癒ゆ。依て聊か巴詞を連ねて、以て恩を謝す。）

「白扇を倒さに置き、当に框に坐す。封包載せて出し」とは、病気の癒えた京伝が框に坐して謝詩を書いた白扇に謝礼の金子を載せて出す様子であり、逆さ富士を踏まえての表現であることはいうまでもあるまい。したがってこの書簡の前者は、「対富真人」、真人は道家にて道徳成就の人、すなわち儒医の「横山対富」先生に宛てた寛政十二年庚申の夏（五月か）十四日のものということになる。なお享和三年版『東海道人物誌』の三島駅に、医・家相・算学として横山玄與（穏通、字子貞、号浮舟）なる人物がいる。

後者の「呉錦洞老爺」は、医師を紹介した京伝の知己の地元の人物であろうか。

なお文晁と京伝のことについては、森銑三「谷文晁の研究」（著作集、第三巻）に、加藤元亀の『我衣』巻八を引いて、文化八年（一八一三二）三月に文晁が京伝と弟の京山・元亀を招いて画談をしたこと、また野村文紹「写山楼の記」に京伝が文晁を度々尋ねて雑談をしたことをあげている。ともに縁あるものとみてよいであろう。

京伝の弟子であった馬琴の書簡の数の多いことはよく人の知るところであるが、京伝のそれは少ない。今、『山東京傳全集』が刊行されている時期に、知友嗣永芳照氏より本書簡の存在を知らされたことはまことに喜ばしい限りである。

本資料の発表を快諾された清水氏の御好意、また森清涼子・伊藤大輔・岡戸敏幸氏等の御教示に深甚の謝意を表する次第である。